咸臨丸太平洋横断航海150周年を迎えて⑦ 帰国後の動向

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

日本人として知るべき幕府遣米使節

前回まで詳細に見てきたように、万延元年の幕府遣米使節はアメリカ政府と国民の大歓迎を受けるなか、ブキャナン大統領に謁見して国書を手渡し、国務長官カスと日米修好通商条約批准書交換の大役を果たした。そして先進国アメリカの近代施設視察によって得た知識を元に、幕末に始まる小栗忠順らによる日本近代化。こうした幕府の功績は維新政府のイデオロギーによって教科書に載ることもなく現在に至り、したがって私たちも学校で習うこともなかった。しかし明治以来の教育基本方針も終戦後に180度転換され、それから65年が経過した。小栗上野介顕彰会が提唱するように、そろそろ江戸幕府のサムライたちの華々しい活躍が教科書に載ってもよいのではないだろうか。いまだ脇役の咸臨丸の航海を中心に学習するのは、明らかな矛盾である。

また咸臨丸にしても、勝海舟と福沢諭吉が乗艦していたと紹介するレベルの新聞記事や書物が多いが、のちに脚光を浴びるこの二人も、太平洋横断航海で勝は海軍士官としての能力や適正を欠くことを露呈し、福沢に至ってはサンフランシスコでボヤ騒ぎを起こしたことぐらいしか目立ったことはしていない。

日本海軍創設の功労者の一人といえる木村摂津守喜毅。艦船の運用に於いて真の海の男としての活躍をしたジョン万次郎や浜口興右衛門。ベテランの米国海軍士官ブルック海尉と航海を共にして初めて分かった小野友五郎の比類なき天文や数学の知識と航海術。ブルックが頼りにした優秀なる蒸気機関担当士官の肥田浜五郎・・・・、挙げればきりがない。彼らの幕末から明治にかけての活躍と、日本近代化に果たした功績を忘れてはなるまい。

国産軍艦の設計

長崎海軍伝習所に学んだ優秀な面々にとって、自分たちの手で蒸気軍艦を設計建造することが当面の目標であった。咸臨丸で渡米し、サンフランシスコのメーア島海軍工廠を見学してその感触を掴んだ小野や肥田らは軍艦建造に動き出す。
小野友五郎：船体の基本的設計計画。
春山弁蔵：船体の構造設計。
肥田浜五郎：汽罐、主機、推進器の設計。
安井畑蔵：艤装、船具担当。
沢鉄太郎：大砲担当。

このメンバー全員長崎海軍伝習所一期から三期の出身者で、小野がプロジェクトの主任を務めた。万延二年（1861）幕閣の承認を得て、いよいよ純国産の港湾防御用砲艦「千代田形」の建造が開始される。基本方針は外国人の手を一切借りないというものであった。

小野友五郎はサンフランシスコから帰国後、江戸湾の測量調査など海防に関する仕事が山済みで多忙な日々を過ごしていたが、文久元年七月（1861・万延二年を改元）、幕府の必要人材として陪臣から異例の出世を果たして幕臣に登用され、軍艦頭取に任ぜられた。加えて後述の小笠原派遣の命を受けたので、蒸気軍艦設計の補佐として、咸臨丸で小野の助手を務め、築地軍艦操練所教授方に就任していた赤松大三郎（則良）を指導して任せることにした。

日本人だけの手によって設計・建造された国産第一号の蒸気軍艦「千代田形」。小野友五郎、春山弁蔵、肥田浜五郎、安井畑蔵、沢鉄太郎、赤松大三郎ら長崎伝習所出身の優秀な面々によって、港湾防御用砲艦「千代田形」の建造計画は推進された。

小笠原回収と領土問題の決着

文久元年（1861）十二月四日、小笠原を回収（領有権の主張）して開拓するため、外国奉行・水野筑後守忠徳を司令官とする外国方と、小野友五郎を艦長とする海軍方一行が、咸臨丸に乗艦して品川を出航した。水野と小野は伊豆国附島の範囲を広げ、小笠原より南の火山島（北～南硫黄島）まで調査した。小笠原より南に艦隊が停泊可能な島があれば、小笠原だけを回収しても江戸湾海防には不安が残るわけで、非常に賢明な考えであった。結局小笠原諸島だけが艦隊の前線基地になりうることが分かり、小野ら海軍方が測量をして、小笠原群島実測図を作成した。古記録から地名を確定し、現地には日本固有の領土とする由来を誌した石標を建てた。小野の小笠原群島図は伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」以来の日本新測図であった。

ホワイトハウスでブキャナン大統領に謁見する幕府遣米使節。使節団のアメリカ訪問によって両国には真の友好関係が樹立されたといってよいだろう。当時は写真製版の技術が確立されておらず、新聞にはこのようにイラストを印刷していた。多くの日本人らしき従者が使節の後方に描かれているが、イーストルームには正使新見、副使村垣、監察小栗の三使節と国書を持った成瀬（外国奉行支配組頭）及び通訳の名村しか入れなかったはずなので、このイラストにはだいぶ誇張があるようだ。

（ハーパース・ウィークリー紙より）

捕鯨最盛期を迎えていたこの時代、小笠原には既に外国の移住者もおり、通弁のジョン万次郎らが折衝に当たり、外国方は八丈島からの開拓民移住の手筈を整えた。一連の任務を終え、咸臨丸が品川に帰港したのは四ヶ月後の三月二十日であった。

幕府は早速精密な小笠原測量地図などの資料を示し、英米に領有権を通告した。英国は自分たちの領有を主張したが、米国はアメリカ人移住者に対する既得権を認める幕府の方針に異議なく、日本の領有権を了承した。そこで幕府はフランス、オランダ、ロシア、プロシア、ポルトガルに対し領有権通告を行い、併せて開拓・殖民を開始して小笠原近海での捕鯨の奨励をした。

司令官・水野筑後守忠徳や咸臨丸艦長となった小野友五郎らによる検分と測量によって、小笠原群島は日本の領土となった。

ところが小笠原領有推進者の老中・安藤対馬守信正が失脚し、政事総裁職に就任した松平慶永（春嶽）は翌年小笠原開拓中止の決定をして、移住者総引き揚げと捕鯨事業中止の命令を下した。小笠原諸島は外国人移住者が残るだけの島に戻ってしまったのである。外国と関わることを嫌った攘夷思想に配慮したもので、福井藩主の春嶽は藩政改革を断行し、明治政府では議定に収まったことから賢侯などと持ち上げられているが、国を預かるほどの資質や先見の明を持った人物ではなかったといえる。最終的に小笠原は維新後の明治九年、再び領有確認の手続きが必要となった際、小野友五郎による精密な「小笠原群島実測図」の存在によって英米の主張を退け、日本の領土と確定されたのであった。

江戸海防計画

小野は江戸湾口を測量して海図の作成に着手し、文久二年（1862）「江都海防真論」七巻を著述し、二年後には増補改訂版の「江戸海防論」を幕府に提出する。サンフランシスコ湾を囲む大砲を参考にし、品川台場に加え江戸湾口の富津、猿島、観音崎に砲台場を設置し、台場には港湾防御用砲艦「千代田形」を配備して台場の死角を補い、江戸海防をより完璧にする構想であった。攘夷派の観念的な海防と違い、国際的にも通用する海防計画は、現実を正しく直視できる小栗忠順や木村喜毅の下で働く小野の真骨頂であった。「千代田形」は江戸湾二十隻、大阪湾に十隻が配備計画された。幕府の瓦解で「千代田形」は結局一隻しか建造出来なかったが、砲台場は明治政府に引き継がれ、東京湾口に砲台と海堡を建設した。のちの日露戦争の際、ロシア海軍ウラジオ艦隊三隻が津軽海峡を通過して首都東京に向かったが、東京湾侵入をあきらめたのは、小野の「江戸海防論」によって設置された砲台場の存在だった。

小栗の上野介任官

帰国後外国奉行に任じられた小栗豊後守忠順は、文久元年（1861）四月、ロシア軍艦による対馬占拠事件の折衝のため、当地に派遣される。ピリレフ艦長はあくまで対馬藩主との交渉を要求し、幕府代表の小栗とは主張が噛合わず、対馬藩主と交渉するには自分をピストルで撃ってからにしろと迫ったが、命がけの交渉も埒が明かず頓挫した。そこでしたたかな老中・安藤信正がロシアと覇権を争う英国を利用して動かそうと公使オルコックに情報を流し、驚いた公使はすぐさま英国軍艦を派遣させた。英国の牽制によってロシア軍は退去し、最終的な決着がついた。小栗は幕藩体制の矛盾と国防体制の完備が急務であることを痛感する。

文久二年に小栗は勘定奉行に任じられて幕府の財政を任される要職に就いた。その後小栗は豊後守を改め上野介（こうずけのすけ）を名乗ることになったが、これは白河藩主を継いだ阿部豊後守正外が老中に上がったので、同じ豊後守を名乗るのを憚らなければならなかった為といわれる。小栗の周辺には、上野介は吉良上野介を連想して縁起が悪いと言う者もいたが、上野には小栗の知行地があって親しみもあり、小栗は意に介さなかった。

（＊このシリーズでもたびたび登場する守（かみ）とは律令制度の国司のことで、奈良・平安時代には中央から派遣された地方国の長官であったが、時代が下ると形骸化していき、安土桃山時代以降には名目だけのものとなり、江戸時代には“従五位下”以上になれば守を任官した。日本人に一番知られているのは南町奉行や寺社奉行を務めた大岡忠相の越前守であろう。また諸国の中で上総（かずさ）、常陸（ひたち）、上野（こうずけ）の三国は親王が長官を務める親王任国となっている為、この三国を任官する場合は次官である介を名乗らなければならない。）

小栗は幕府瓦解までの間、勘定奉行をはじめ、南町奉行、初代歩兵奉行、陸軍奉行、軍艦奉行、海軍奉行などを任ぜられ、勘定奉行と兼任することも多かった。小栗は頭の古い老中に歯に衣着せぬ直言で罷免されたり自ら辞任したりしたが、幕末の逼迫した経済状況の中、結局小栗に任せるほかなく、クビになってはまた役を授かるといった具合だった。才能溢れながら一部の幕閣に疎まれ、大目付や若年寄などの旗本最高職には就けず、力を十二分に発揮できなかったことは惜しまれることである。しかし、「またも小栗様のお役替え」と言われるほど就任と辞任を繰り返しながら、近代化の数々を推し進めた才覚には驚くより他はない。

そして元治元年（1864）十一月、小栗はいよいよ幕末最大の事業、横須賀製鉄所建設に動き出す。

（続く）